

「進行がん・終末期がんを患う対象者の就労希望に応える作業療法士の社会的意義の究明—『がん診療連携拠点病院』を対象とした調査」 研究経過報告



阿瀬 寛幸 氏

作業療法ジャーナル研究助成経過報告

阿瀬 寛幸

(順天堂大学医学部附属順天堂東京江東高齢者医療センター, 作業療法士)

現在、共同研究者である櫻井卓郎氏（国立がん研究センター中央病院, 作業療法士）と関原雛子氏（筑波大学大学院人間総合化学学術院, 作業療法士）と共に、定期的にミーティングを行いながら、研究を進めております。進捗としては、全国のがん診療連携拠点病院 461 施設の作業療法士の方々に郵送にてアンケートのお願いを致しました。結果、300 名近くの方々からご回答をいただき、大変貴重なご経験を共有いただきました。本研究にご協力いただいた皆様に、あらためて深く感謝申し上げます。

アンケートの結果は、第30回日本緩和医療学会学術集会で報告をし、優秀演題として採択いただきました。発表後も、医師や看護師、社会福祉士等、多くの方々からお声がけをいただき、関心の高さを感じました。同時に、全国の作業療法士の方々が、完全な就労復帰が困難と

なる進行した病状においても、対象者一人ひとりの多様な思いを丁寧に汲み取り、工夫を凝らしながら「働くことの意味」に寄与する時間を共有していることが明らかになりました。嬉しさとともに、こうした貴重な実践の実態を、責任をもって学術的に報告していく必要性を強く感じました。一方、病状の悪化や制度的な制約によって目標達成が困難となり、支援の限界に直面している作業療法士も多く、完全な正解というものがない中で、どのように展開していくべきか、さらに考えていきたいと思っております。

今後は、インタビューを通じて、より詳細な質的分析を進め、支援実践の特徴や現場での工夫を明らかにしていく予定です。引き続き、この大切な作業療法の過程を丁寧に捉え、実践の意義を伝えていけるよう取り組んでまいります。